「言語の金使い」

ジャン・ジョゼフ・グー著、土田知則訳

今世紀初頭、金本位制が崩壊へと向かい、文学からリアリズムが消えつつあった。二つの現象は無関係なのか。ジッドの「贋金使い」などを分析しながら、双方の密接な関係を明らかにする。

金貨は物の価値と取引の信頼を確かなものにしていた。金貨から紙幣へと移行する中で、経済活動は実物的な動きから虚構的なものへと変質。言葉もリアリティーから記号へと姿を変えた。このまま文学は、単なる記号遊びの遊具へと転落し続けるのか。

（新曜社・二八〇〇円）